

平成29年度 第1回芦屋市市民参画協働推進会議 会議録

日 時	平成29年11月21日(火) 午前10時～正午
場 所	東館3階中会議室
参 加 者	会 長 渡辺 直子 副会長 平野 隆之 委 員 榊原 貴倫 加藤 裕介 山岸 吉広 松井 順子 欠 席 田中 隆
事 務 局	事務局 稗田 康晴 企画部部長 山田 弥生 市民参画課課長 御宿 弘士 市民参画課係長 三浦 真衣 市民参画課課員 飯星 雄麻 市民参画課課員
会議の公表	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 部分公開
傍 聴 者	0 人

1. 会議次第

- 1) 開会
- 2) 議題
 - (1) これまでの市民参画・協働について
 - (2) これからの市民参画・協働について
- 3) 閉会

2. 配布資料

- 資料1 市民参画協働について
- 資料2 平成28年度参画協働事業の実施状況
- 資料3 平成29年度参画協働事業の実施予定
- 参考1 芦屋市市民参画及び協働の推進に関する条例
- 参考2 芦屋市市民参画協働推進会議規則

3. 審議経過

- 1) 開会
 - ・市長挨拶
 - ・自己紹介
 - ・会長, 副会長の選出
 - ・会議の公開, 傍聴についての確認
- 2) 議題
 - (1) これまでの市民参画・協働について
 - (2) これからの市民参画・協働について

(渡辺会長)

それでは、さっそくですが、議題1に移ります。議題1これまでの市民参画協働について、事務局よりご説明をお願いいたします。

(事務局：御宿)

◆事務局より資料確認

◆事務局より「資料1：市民参画協働について」に基づき説明

(渡辺会長)

いまの説明の中で、お気づきの点、もしくはご質問などがあればご発言ください。

松井委員は芦屋市民ですし、今のご説明の中で思われたことはありますか。

(松井委員)

例えば、事業提案をされて今年度補助金を給付したとのことでしたが、実際にはどんな事業を採択されているのでしょうか。

(事務局：御宿)

今年度の提案で採択しました事業としては、1つは岩園町自治会の取組です。岩園町は震災以降、20年近く自治会活動が事実上休止状態という経緯がありましたが、今は自治会活動を再開されています。その岩園町自治会の方々が、休止期間が長かった影響もあり、より地域の方と交流を深めたいということで、社会福祉施設の場を借りたり、あるいは個人の家を借りて皆さんで集まって交流ができるカフェみたいなことをしたいという取組です。その活動経費を補助するというのが1点目です。

2つめは、喜楽苑の北側に広場のような小さなスペースがありまして、そこで喜楽苑の中に入所されている方や地域の子どもたち、園芸ボランティアグループと一緒に園芸などをしながら和めるスペースを作りたいという、場づくりの取組に対して採択しました。

3つめは、既に事業としては終了しましたが、今年は芦屋市が市政施行77周年の年であり、また、50年前にウルトラセブンのロケ地として芦屋市で撮影されました。メモリアルイヤーの機会を生かして市民の方が中心となり、この8月末に子どもたち向けの様々なイベントを開催しました。その中で、映像関係に携わっている方々が、子どもを巨大化して映し出し、バックに芦屋市の風景と重ね合わせるという取組をされました。自分が大きくなって芦屋市を見渡すことによって、また新たな芦屋市を発見してもらおうという取組に対して採択しました。

最後が、I LOVE ASHIYA という東日本大震災関係の支援をされているグループがございまして、その方々よりコーラスを通して被災者を支援しようという取組を提案いただき採択しました。それら計4つの取組に補助をいたしました。

(松井委員)

芦屋市は市民として南北問題と言いますか、北と南の交流がなかなか難しいと言われています。

市としてはそういうことも含めながら、市民参画のまちづくりに取り組まれてきたと受け止めてよろしいでしょうか。

(事務局：御宿)

市としましては、南北に関してはそこまで意識をしていません。問題の分野によると思います。大きな問題に関して地域が決まっているのであれば、その地域に入ります。今回の補助金の話で行けば、地域性を考慮するというより、取組そのものがより地域課題解決として効果的であるかどうかという観点により選ばせていただきました。

(松井委員)

ありがとうございます。

(渡辺会長)

他に何かありますでしょうか。

(加藤委員)

今、話を伺って資料を見ていた中で、市なので本当にやらなければいけないことが広範囲になるとは思います。これまでしてきた中での課題や、特にこの分野で芦屋市として特に力を入れていきたいところや、課題があればお聞きしたいです。

(事務局：御宿)

その点は、この先にご提案させていただきたかった内容になります。

課題として認識していることの1つに、行政サイドの話なのですが、市の組織として市民参画課があり、市民参画協働施策を進めています。一方で市は今、これからの少子高齢社会を見据え、福祉の側面からも地域に入って、行政だけでなく、色々な地域の力や協力を得ながら、これから皆さんがお互いを支え合える環境づくりをやっていきましょう、という取組を進めている中で、行政内部において、福祉的な参画協働のまちづくりを進めている課と、市民参画課があるため、課の役割には曖昧な部分があります。市の中での整理が明確ではないという認識です。

もう一つの課題は、市民の方が市民参画協働を進めたほうが良いと思っていられるのか、本当にそれが必要なのかと感じておられるのか、どのように感じておられるのか、非常にわかりにくい部分でもあります。

市民参画協働と言いましても範囲が非常に広範囲にわたっていますので、よくこの分野では地域課題といいます。お困りごとなどを市民同士で助け合っていましょね、ということも市民参画協働の1つだと思えますが、これは地域性にばらつきがあるものだと思います。例えば群部では、人口減少や高齢者だけの集落しかありませんとか、集落も消滅しそうですという問題があれば、そこをなんとか活性化しましょねという流れで市民参画協働が進む場合があります。それ以外では、福祉的な面のアプローチとして、比較的貧困層の方が多い地域であれば、その方たちを支援しましょねということで、市民参画協働が進む地域もあります。

この点においては、芦屋市の場合は市として非常にまれな地域性で、市民参画協働をどういう方向性でやるべきなのか、行政サービスを実施する中で行政が市民から色々な意見を聞くことは必要ですが、もっと市民の方の活動を活性化させていく、力を掘り起していくという、1番最初のきっかけをどう作っていくのか、それにはどういう方向性で取り組むのか、というのが見えにくい状況であります。

(渡辺会長)

私も同じように感じています。

その部分が、議題2の「これからの市民参画ってどういう方向に行くべきなの」とか「可能性としてどこに課題を見つけられるか」もしくは、「今見えてないものがあるのか、ないのか」とか、そういうようなこと論議していくという中で、議題2の話になるのかと思います。

これについて今から事務局からの説明がありますが、ここの部分については説明に対して私たちの意見を求められますし、ここに参集した今日の大きなテーマだと思っています。

それでは議題2「これからの市民参画協働について」事務局に説明をお願いします。

(事務局：御宿)

◆事務局より「資料1：市民参画協働について」に基づき説明。

(渡辺会長)

ただいま事務局から私たちに投げかけたことがこの会議のポイントになると思います。

まずひとつ目は「どの方向性で芦屋市の市民参画協働を進めるべきなのか」これは大きな課題ですね。次に「芦屋において人と人とをつなぐのはなぜ必要なのか」今の地域性において、そんなに人がつながらないとやっていけないのかということも含めてですね、そういう論議もあります。もうひとつは「芦屋における市民参画の在り方ってというのはどういうものが適切なのか」この3つの投げかけがあります。

これについて議論したいと思います。特に3つ目の在り方は、芦屋市における市民参画協働の在り方とは何なのかがとても大事な問題で、私が今まで色々見てきた市町の中で市民参画協働が進むところはすごく困った課題がはっきりあるところが多いです。例えば、人口減少が激しいとか、高齢化が進んでいるとか、格差が激しいとか、貧困があるとか、子どもの問題があるとか。それらが、すごくコアになって、そこからみんなでこれは地域の問題として解決しなくてはという意識が集まってきて、さらに展開していくというパターンが多いです。その部分における芦屋のこれはなんとかしなくてはというのは何かという議論を、皆さんにさせていただけたらと思います。

社会福祉協議会の山岸さん、そのあたりはいかがでしょう。

(山岸委員)

私の立場では、地域の中で住民の方と話し合う機会が多いのですが、福祉の切り口から言いますと、高齢化の問題、マンション問題が挙げられます。自治会を運営するにあたって、マンショ

ンの方の加入率が低いとか、マンションに住んでいる方の顔が見えない、という問題があります。そこに住む方々の孤独死という部分も問題となっており、顔の見える関係づくりというのが課題です。

また、昨今、問題となっている生活困窮者や経済的に苦しい方々が地域に埋もれてしまっているというところで、社会福祉協議会としてはそういう方々のニーズの掘り起こしが大事だと思っています。

しかし、具体的に住民の方と協働するとなれば、住民の方の本当の率直な気持ちを聞いていけないといけないのかな、と常々感じています。

(渡辺会長)

住民ヒアリングというのが必要ということでしょうか。ワークショップとか。

(山岸委員)

地域の住民との会議では、我々福祉の専門職だけで、テーマを選んで「こういうことをやりましょう」というような過去の取組がありました。芦屋市内には9つの小学校区があります。1つは廃校になっていますが、それぞれ小学校区ごとに特性も違いますので、地域の会議で取り上げる課題やその解決へのアプローチも違ってくると思います。

(渡辺会長)

榊原さん個人のご意見として何かありますか。

(榊原委員)

先ほどの事務局からの説明を聞いていて、市役所から見た市民参画協働の現状という説明が、資料を見たときにすごいそうだなって思っています。市役所としてすごく考えつくしてくれているのはわかりますが、市役所側からは市民が1つに見えているように感じます。多様性といえますか、ライフスタイルだとか個人個人の状況が多様なものが芦屋にはありますが、市民一人一人に全然違う状況にあることが、今までの取組の中で、どこまで見えているのかなということを知りたいです。

もちろん市は担当者が変わったりするので、一人一人で個人の関係性はバラバラだと思うのですが、分野別で調査もされているだろうし、コミュニティや企業とのやり取りが発生しているだろうし、地域によっては協議会を立ち上げて意見を出しているだろうし、実際に芦屋のまちの中での分布はどうなっているのか、各分野が情報を出し合って整理ができないものかな、というのがまず一つ思います。

福祉では、地域の見守りのための協力関係は地域主体でやっていってほしいと思います。結局、地域においても困りごとが喉元に来ないと、何に困るかをみんな知らないですね。

例えば、我が地域は来年にはよその地域の状況に近づくとなった時に、よその地域の方がすごい喉元熱くなっていたとしたら、その人たちの話を聞くと、来年には我が地域はこんなことになるかもよ、みたいな話ができたりするので、そういうのをつなぐところは市役所が情報をたくさ

ん持っているのじゃないかなと思います。情報としてコミュニティとコミュニティを繋ぐだとか、専門家を繋ぐ情報は市役所が多いと思います。

地域がやれることをもっと明確にうまくPRできていけば、市民の中での自浄作用というかまちの中でも自分たちが健康になろうと作用がでてくると思います。芦屋は地域のブランドが強い所なので、簡単に人が出ていくという選択をしないところだとは思いますが。その中で何が足りないのかや、傾向をできるだけ早めに関心を持っていくのが大事なのではないかと思います。

できる議論があるとする、多様性をキャッチアップする情報が取組の中でどのようなものを持っているのかなどを教えてもらえると、こういうアプローチを次にできるのではないですかという提案ができるのではと、IT関係では思います。

オープンデータの推進という意味合いで、福祉の危機状況とか、社協からの視点だとか、大学の先生の視点だとか、ITで単純にあるなしでものを割ってみるとかも含めて、みんなで情報と分析を見ながら話してみると仮説検証とコミュニティがそれに近いかどうかなど、建設的な前向きな議論がしやすいのではないかと思います。

(渡辺会長)

ビッグデータからキーワードを抽出して、そこから分析をして正しいかどうかをアナログにヒアリングやリサーチ、ワークショップで確認するという作業が必要ということですか。

(榎原委員)

芦屋市民の人数であればビッグではなく、パソコン一台でエクセル集計ができる規模なので、小さいデータでできると思います。

ビッグデータとなるとAIとかを入れていくと、すごい量の情報が必要となり、それを整備するのが大変です。どちらかという人と人を上手く使っていった方がいいと思います。

例えば「すごい意見がくるんです」という言葉って結構難しく、「すごい」の表現で3件かもしれないし、1億件かもしれないですね。その「すごい」が何件なのかが知りたいです。例えば社協さんのところにも相談件数というのが実際には何件なのか、どう「すごい」のかというのがわからない、というのが一般感覚だと思います。その「すごい」とされる意味合いが何なのか、もう少し深掘りが本来できるはずですが、伝え方としては、これからどの程度課題が増えるのかという温度感が自分事にしにくく感じます。

例えば、僕らも初めて福祉の現場に行ったときに作業療法士と話しましたが、突然介護が必要となった状況で、「家族構成が似ているかどうか」、「あなたの家の間取りどうするか」って言われるのですが、相談者からすると、作業療法士さんが言っている「こういう介護の条件がありますよ」という病名がわからないところから始まると、家の改造にいくらかかるかというのわからないし、誰に電話していいかわからないし、というところから始まります。自分の家族構成が伝えられるから、そういう可能性があるんだと理解できます。健康情報や健康診断の情報で何歳からそのリスクがこれ位あがりますよと言われた時に、では家族会議をしとこうかと、いうところからスタートすると思います。

ご近所さんに関して大変なところだと「近所に誰がいるだろう」というところから「ゴミ出

しのコミュニティって誰が参加しているのだろう」、「誰に話したらいいだろう」という、アテンションとして、例えば働いている世代にどう伝えるのか、まずそういうきっかけに対してどこから導入していった自分ごとにしてもらうかっていうのが結構大事だなと思います。

できるだけ「すごい」とか「多い」という言葉よりは「今、実際あなたの地域はどうなっているか」が言えるほうが良いと思います。

データは個人情報となるので渡し方が難しいですが、民生委員さんとか地域の協議会、自治会とかなら自発的であればできることですよなと思います。情報が芦屋の中ではよい事例となり、一番近いところ同士で繋がってもらえるという考えにシフトができるようなものが、市民参画協働の中にあるとすごくいいのではと思います。

(渡辺会長)

ありがとうございました。

平野副会長、ご専門的な話も含めてコメントを頂いてよろしいでしょうか。

(平野副会長)

そうですね、今のまちづくりを若い人達が何を考えているのかそう簡単に聞けないので、委員になって良かったなと思います。

先ほどの話しを少し整理する点で、これまでどういったツールで市民参画協働を進めてきたかと言いますと、例えば条例化というのも一つのツールですし、同時に計画というのも一つのツールですし、活動センターもツールだと思います。

先ほど言われた市民提案型事業補助金もツールだと思います。そのツール一つ一つがどこまでの状況に達しているのかというのは、今この場で決める必要はないですが、厳密に決めなければいけないと思います。その中で一つ気付いたのが、市民参画課という組織そのものがツールとして、どういう段階にあるのかというのは考えた方がいいと思います。地域を今後どういうふうに強化するか、国からの言葉だと強化という表現になりますが、そこを他の課とも連携しながらどのように進めるかというとき、市民参画課が持っているツールとはいったい何か、というのが一つ思うところではあります。

この委員会も計画策定というツールとともに市民参画課が、この委員会をパートナーといえますか、外付けの存在として、つまり計画はアウトプットでもあるけれど、計画のプロセスの中で行政組織がどのように変化していけるかという側面があります。この委員会を外付けのツールとしてどう使ってもらえるかというのが一つ、今日の話聞いた中でのポイントだと感じます。その中で今言われた「情報」という問題が一番の結果になるかなと思います。

例えば、大学でこれまでも介護保険の認定データの分析を地域にプロットしたことが芦屋ではあります。介護保険の認定データには郵便番号コードがついているので、それを使いどの地区に要介護者がどれ位いるかということ全部プロットしたという経験があります。ただこの作業は負担感があります

今言われたように、地域を煽ると言いますか、一つは、「あなたの地域は今後何年でどこまで人口が減りますか」という問いかけが、人口減少の地域では一番効きます。だいたいNPO系の人

たちが、細かい町単位でデータを出して人口推移を出すことによって意識が変わる、という考えがあります。私はあまりそういう手法がいいとは思っていないですが、通常はそういう手法です。

私が座長をしています、総務省系の地域づくりと、厚労省系の地域づくりが連携しなくてはいけないという研究プロジェクトが、厚労省系から立ち上がっています。芦屋は福祉もやるし危機感もない立場だと思っている中、別の意味でその第三局といいますか、今日話を聞いていて、そういうことなんだとつくづく思いました。

危機感がある所は煽ってもいいですが、芦屋市に対してはただ煽らないで、今言われたように、情報を住民に見せていって、そこへどのように参加して情報を基にしながらかが事にできるか、個人情報をごとまで乗り越えられるか、というのを考えてみるのも一つの手法だと思います。

地域福祉の歴史も、昔は非行少年がどの地域に何人いるかまで把握し、マップを作った経緯があります。今はそのような事は簡単にはできないが、やはり古くからはそういう手法を福祉は取ってきたという部分もあるので、そういのを今後どう考えていくかというのも1点です。

あともう1点、結局、参画という概念と協働という働きかけていくこととは、少し異なる議論があります。先ほどの総務省系の整理からすると、通常、協議機能と実施機能の二文法をとる形となっています。ですから地域組織でまちづくり協議会とか社会福祉協議会とか地域の組織を取り上げた時に、協議機能と実施機能を一体化している組織なのか、別々に扱う組織なのかを厳密に整理したほうがいいというのが、通常の議論になってきます。

つまり実施機能というのは、そこで協議した内容を実行するということです。例えば「ゴミ出しを協力しましょう」というのは、まちづくり協議会ではゴミ出しの問題が多いという議論はするが、まちづくり協議会が実施機能まで持つのかと言われると難しいということです。

そういうことがあるので、参画を協議機能とする時に、実施機能までをどのように持つのか、とするとやはりハードルが高いと思います。

市民参画課というのはそこに踏み込むのか、もしくは各部署が持つのか、というのが市民参画課のツールとしての境目なのではと思います。話しだけをしていても問題を内包しているだけだと思います。

私の認識では、試行的に何かするというのを段階的に一つ間に入れて、実験をしてみてもいいのではと思います。先ほどの補助金の件も、実験的に一年単位になのだろうと思っています。

そういうことに、比較的ハードルが低くなるような市民協働という方法を進めるのが一つの実施。実施というのは継続実施も含みますが、やはりNPOで外に出した方がいいという議論になるのですが、そこまでいかない市民協働の守備範囲をどのように設定するかだと思います。

それでいくと芦屋市全体で市民提案型事業補助金の採択件数が4件というのは少ないという印象です。もう少し事業内容を細分化したり、色々な実験の仕掛けとしてもう少し補助事業の取組を大きくしてはどうか。例えば民間の助成金を使うとか、色々な形で、ファンドも活用するとか、あるいは企業の人たちの参加も得たので、そういう広い意味での企業からの寄附だとかも考えて、実施というより実験として試してみるっていうのも、大きなファンドをやる段階にきているのかなと思います。

それと協議と実施の二文法の重さでいえば、小さい所の実施はいいですが、大きい所は継続実施がかなり厳しいように感じます。そのあたりを実験的や、お試しという要素として今ここで考

えてみるというのは大事ではと思います。

資料に青と赤の範囲の絵があるんですけど、国の厚労省系の整理だと個人の地域生活課題と呼んでいます。個人の生活課題はかなり私生活の中身になってしまう課題になってしまうので、個人でも地域生活課題。例えば、個人が地域で抱えるトラブルであるとか、個人の生活課題を取り上げると関わりにくい側面があります。今の政府の要望は地域課題と地域生活課題で、この2つを結構厳密に分けています。そして法律上に地域生活課題という言葉が今回の社会福祉法で載りました。今まで福祉は一般的な生活課題と言われていましたが、今回法律上で地域生活課題というのが社会福祉法第4条第2項に出ましたので、ここは地域生活課題で限定しといたほうが、地域課題と地域生活課題が重なる部分もあるし、別々の部分もあるしということです。

(渡辺会長)

市民参画として扱う領域について定義しといたほうがいいということでしょうか。

(平野副会長)

生活課題っていうのはむしろパーソナルな要素が強いので、それは個人の生活の質の方でこの協働の範囲ではない、個別の生活課題ということです。しかしそれが地域生活課題になってくると時に接点が見えてくるというのが国の法整備の考え方です。だからといって生活課題を無視していいという意味では決してないです。ただ市民協働側からするとこの程度にしといたほうがいいかなと思います。

(事務局：御宿)

平野副会長のお話を踏まえて、資料を修正させていただきたいと思います。

1点だけ追加で皆さんに投げかけたいことができて、先ほどの平野副会長の話しの延長になると思いますが、個人の生活の質を向上させる取組に対し、行政としてはどう関わるべきなのか、ということが疑問点としてあります。芦屋における市民活動とか市民参画協働というのは、地域課題や地域生活課題を解決するなどのように、課題解決のために協働するのはもちろんのことですが、必ずしも課題解決ばかりではなく、生活自体を豊かにするために、個人の私生活プラス、仕事以外のもう一步を踏み出すきっかけを、例えば「やってみたい」や「関わってみたい」と感じて、楽しみの部分から活動に踏み出していくというきっかけづくりも、芦屋市ではその方向性があるのではないかと考えています。

ただし、行政としてはそこまで踏み込むのかという考え方もありますし、それに対する関わり方について今、明確な考えや手法を持っていません。先ほど平野副会長がおっしゃった市民参画課のツールは、まだまだ整備されていない状況だと思います。

この先、地域の方の世代交代が進んでいくと、今の高齢者の方とは全然趣味や考え方が異なる方が60代70代となっていきますので、地域への関わりに対する考え方が根底から違ってくるのではないかと感じています。そのような状況において、地域の様々な活動を広げていくためには、最初の一步を踏み出す機会を作っていくことが重要で、楽しみの方面からも作っていく必要があるのではないかと考えていますが、皆さんがどう感じておられるか、ご意見をお聞きしたい

ところでは。

(渡辺会長)

市民参画のタイプは大きく二つあって、まずは課題解決型。ここに住む上での困りごとをなくすということです。もうひとつはQOLのアップ型です。要するに、クオリティオブライフを上げるための「ここに住むと楽しいよね」っていうものを作っていく形ですね。嫌なものをなくすことと楽しいことをやってみるという二方面から本来はやるべきだと思います。

特に芦屋みたいに恵まれているところであれば、両極から攻めていった方が面白いと言いますか、「せっかくやるなら面白い」方がよいというのが私の今までの町村を見てきた中での感じ方です。

それともうひとつ、平野委員がおっしゃたことで思うのが、市民参画課が実行部隊になるのか、シンクタンクになるのかどっちだろうというのが、市の中でも課の中でもまだ決めかねているという印象です。

外付けのハードディスクのようなシンクタンクになるのか、市民参画課が中心になって公園緑地課や建築課など様々な部署を動かしてやっていくつもりなのか、その辺の立ち位置を明確にした方が私たちの議論がしやすいのではと思います。逆の宿題みたいになってしまいましたが、そのあたりに関して他にご意見がございましたらお願いします。市側に対する提案でも構いません。

(榊原委員)

平野委員がおっしゃった、プロトタイプがすごくいいなと思ひまして、QOLもありますが、健康面を維持するためには社会活動に参加することっていうのを最近では聞くのですが、現役世代は働く場所に行ってしまうので、支援を体験する機会をどの地域も失っているのかと感じています。今回の取組分野もどちらかという、課題がある課が課題のあるコミュニティに対して、難しい顔をして考えて誰もついていけない話ばかりをしてしまっていて、どちらかというもっと楽しいことを、先ほどのウルトラセブンではないけれども地域の社会生活とか地域生活の中で、誰かの家に麻雀で集まろうとかのレベルでもいいのかなと思います。地域のコミュニティをもう1回楽しいことで作っていくという。普段の会話を生活の面も含めてアプローチが何かできないかなと思います。そういうことに取り組んでいる部局は少ないので、そこを業務としてうまく作れて、僕らの事をうまく使ってもいいのかなと思います。

(平野副会長)

実際に介護保険制度の改正があって、生活支援コーディネーターを作って介護予防に貢献することが今始まっていますが、言っていた通り、麻雀をしてそこで楽しく過ごす事や、例えば毎朝6時に起きてグループで犬の散歩をしているのをどのように見るかということについて、大きく2つに分かれています。

潮流としては、制度的な要素を入れてきっちりやるという動きがあって、その担い手にお金を出すという。つまり介護保険から専門的ではない人が定期的に取り組むことに対してお金が出ることになりました。ですから地域づくりに対して介護保険からお金が出るがあります。

ただし、形式を整え過ぎるとやらされ感が出てきて楽しいことからコミュニティを作っていくことにはなかなかならないです。

お金が出なくてもいいけども、毎朝6時にラジオ体操をやっていることを地域社会にも広げて、少しずつ皆で地域に入って小さい所から取り組む必要があることは間違いないと思います。

介護保険制度も地域づくりと言わざるを得ない中で、どのあたりまでをするかというのは、市民協働的な発想が引っ張らない限り、相変わらず福祉制度的な方に戻っていく感じがします。市民に取り組んでもらうことで逆に安上がりさせようとしているのではないか、あるいは切り捨てではないかという議論もあって、それも大事ですが、地域づくりを応援してくれるアクターとして市民協働があり続ける方がいいのではと思います。

麻雀したときの効果を計ろうとすると、難しい議論になりますが、男性は退職後に輪に入れられない人達がいるので、楽しいメンバーになれるといいという、そこに目を向けるというので市民協働とか市民参画というキーワードを使った方が地域づくりを進めやすいと思います。ただし、個々に楽しんでやっている取組に対しては、専門職からすると例えば「あなたたちだけで体操をしているのは地域生活課題のためではなく、個人の生活の範囲では？」となるわけですね。地域生活的なニュアンスでしか専門家は捉えきれないのです。

専門家は、「私たちが診断結果を与えてからだ」という思いがどうしても強いので、そこが乗り越えられない専門職もあります。それを市民協働の施策側で引っ張って専門職も地域住民として一回やってみたら、と言いたいです。

(榊原委員)

介護保険のもっと手前の所で、例えば民間の人たちと何かできないかなという思いはあります。僕も子育て世代だけど親は介護が必要となるまでもう少し猶予があるかなということを感じています。例えば土日に近場で楽市楽座的なものがあると、子どもを遊ばせながら親も一緒に呼んでということができるよう気がします。芦屋は場所があるけども、何かをするときには使いにくいことがあるので、市側から緩和してくれたらと思います。

(渡辺会長)

自発的な趣味活動とか楽しいことをやろうというのを誘発するのであれば、ある程度の規制緩和が必要だと思います。例えば公園でやってはいけないことをあまり多くしないとか、そういうことはすごく大事だと思います。

(榊原委員)

芦屋市の中で営業している飲食店の人たちにも相談してみるとか、意外と僕ら世代で同じように悩みを抱えているけど、自分たちも商売のついでにそういうことを是非やりたいと思っている人はいるのではと思います。

(事務局:御宿)

そこでまさに加藤委員に質問があります。今の話は行政からすると地域の中でのキーマンとい

いますか、一緒に同じ方向を向いて取り組んでくれる方が非常に重要だと思っています。

我々が加藤委員を知ったのが「芦屋ドットシティ」という芦屋の中で色々な取組をされている方を紹介しているメディアを加藤委員が作っておられまして、それに着眼してコンタクトをとらせていただいた経緯があります。WEBサイトの中で色々な方を紹介されています。私は加藤委員より直接ご紹介していただくことのある方で、芦屋でシェアハウスやっている方もそうですし、出前寿司職人の方とか、フォトグラファーの方なども紹介されています。

こういった方々は、本職の活動もありますが、個人の活動として協力して下さる方もいるのではないかと考えています。

(加藤委員)

協力してくれる方はいると思います。僕が芦屋ドットシティを始めたきっかけが、本当に身近な所のつながりで、芦屋市内にすごく面白い人がいるなど感じて、私としては先ほどあがった課題と同様で、芦屋に住んでいて人とつながる必要性はあまり感じていなかったんですね。仕事自体は大阪のお客さんとしているので。しかし、そういう身近に面白い人がいるなら芦屋でもっと面白いことができるのではと思いました。マイナスではなくてより良くできるのでは、と感じました。

それで笑っていいとも方式みたいに、友達の友達を紹介してもらったら、面白い人は面白い人とつながっているんで、どんどん面白い人の輪が増えていって芦屋のつながりで何か面白いことができたらなっていくのがきっかけでやっていました。もっと広げていけば、芦屋で仕事されている方とか、特に女性の方とかもわりと起業されている方が多いので、そういうつながりを使っていけば、何かやろうと思った時に声をかけてくれる人材バンクみたいなものができそうなのかなとすごく感じますし、先ほどの話しにあったように、課題や必要性は感じないけど、僕みたいに人とつながった時に、「面白い」と思うきっかけ次第で大きく変わると思います。プロトタイプではないですが、何か提案や仕掛けていくのもありかな。それで、そういう人材とできる事からやっていくのが面白いと思います。

他の地域はわかりませんが、芦屋は個性的な人が住んでいる割合が高いのではと思います。個人的な感想ですが。

(渡辺会長)

芦屋って個性的な人が住んでいるのに、個性を出し惜しみしているように私はとても感じていて、もっとはじめて自分が面白いことの主体になるという気持ちがあればもっといいのと思います。自分が何かを始めたり中心になったりすることは敬遠するけれど、誰かがやったら協力してあげてもいいよという感じが、芦屋の方々に対しての私の印象です。

(榊原委員)

個性的な事をやっている人も自分が個性的だとは思っていない可能性があります。自分では当たり前なことをやっているけど人から見ると変わっているケースなどは、周りがおもしろいことしているねと教えてあげると、それを広めていこうというきっかけになると思います。参加して

下さる方にもプラスになるのではないのでしょうか。

若い人たちが本当に忙しくなっていて、地域の中でお客さんを家に呼ぶ文化が減っているみたいです。普段から人を呼んでいないと、いざお客さんを呼ぶときに、自分の家だと恥ずかしいと感じるわけですね。そうするとホテルを紹介するんだけど、お客さんが明日どこに見に行ったらいいとか、何を食べたらいいのかとか、どういうまちなのかを聞きたくなった場合に、自分のまちが紹介できないみたいです。でも自分のまちを好きな人が地域にいて、それを言ってくれると、若い人も真似して言い出すと思います。そうすると、自分のまちに何が足りないのかという議論になって、こんなのがあったらいいなとか、探し出したり困ったりして、そこから意外と人のつながりって面白いなと感じて、お客さんをどう受け入れるかっていう話が進むと思います。

まちの中でも色々な地域があって、南と北の色々な文化があって、お客さんとの交流みたいな感じでやり始めるだけでも実は全然違うと思います。そうすると、気を付ける点を教えてくれる人だとか、ここは面白いよと言ってくれる人だとかの意見が出てきて、交流が生まれると思います。

(加藤委員)

人とのつながりに関して少し前の話しになるのですが、僕はもともと東京で教育ベンチャーに勤めていたのですが、かなり前に話題になりました杉並区の公立中学校でリクルート出身の藤原さんという方が初めて民間校長になったという事例があります。そこでやっていた、面白い取組で、木とか芝の剪定を業者に委託していたけど、高齢者の方を校内に入れて、地域の住民の方をお願いすることで、そこで地域の高齢の方と子どもたちの交流、例えば挨拶、おはようとかが生まれて、そのまちに誰が住んでいるのかがわかるようになって、その活動以外でもあいさつをするようになったという事例がありました。また「世の中科」という総合学習があって、そのまちに住んでいる子どものお父さんの仕事を紹介してくださいという、トライやるウィークの逆版みたいな役割で授業に来る取組がありました。

あとは、例えばハンバーガーを食べて、これは何でできているのか、パンは何から作るのかとか、パテは何から作るのかという疑問から、地域の方に世の中にはこんな仕事があるんだと説明に来てもらったりとかして、そこで先生とはまた違う人との交流が生まれて、教育の場ではありますが、世の中の仕事や住んでいる人に興味を持つという意味での地域活性というのが生まれた事例もあります。

人とのつながりは良いきっかけで、次の行動につながるのかなと思っています。教育の場だとセキュリティが厳しい面があるとは思いますが、何かの仕掛けができないのかなと思っています。

(渡辺会長)

皆さんの話を聞いていると、市民参画というのはハードとかシステムとかで考え始めるよりは、もう少し人といいますか、人材みたいなものが芦屋には必要かなと思います。

人材を探し出し、その人たちを活用して芦屋らしい市民参画ができないかと、そのような印象を受けたので、もう少し、精査する必要があるとは思いますが、一番最初に方向性の問題が出ていましたので、そういうテーマもこれから方向性として考えていくのはどうなのかなと思います

が、皆さんいかがでしょうか。

(平野副会長)

最初に言われた市民像を1つに固定しているのではという意味だと思いますね。何人かの固有名詞を取り上げながら、多様性とは何かということを考え直すことと、その際に一番難しい点は、個人的に面白いということだけで市民参画協働を進めていくことは厳しいと思います。そこに何かしらの社会性、課題でなくてもいいと思います。しかし社会性が含まれている中に新しい市民協働が担う課題は何かということを見出すかたちがいいと思います。先に課題をあげるの難しいと思います。

長久手市には「たつせがある課」というのがありますが、芦屋市で言えば市民参画課のことですね。立つ瀬があるというのは、個人の立つ瀬になりますが、本当に立つ瀬があるということは誰かの役に立つということがない限り立つ瀬がないので、そのあたりくらいのバランス感覚かなという感じです。あまり課題を強調しないというか、逆にいうと、面白い人を加藤委員に紹介してもらって皆で、面白い人を探してもいいのではないのでしょうか。

(渡辺会長)

面白い人を探すのは、やっているほうもとても楽しいですよ。

(平野副会長)

「まちづくり人図鑑」みたいなものを作るという、一度、図鑑として作ってみるのもありかもと思います。個人情報加工してもいいと思います。最後は加工しないと、芦屋にはこういうタイプに近いという事実を出すというのは気が引ける問題もあるとは思いますが。なんであの人だけが載ったのかとなってしまうので。

私どもの大学の大学院1年生の最後の取りまとめで、実際にそういった図鑑を提案した人がいて、面白いなと思いました。

(渡辺会長)

実際に真庭市が作っているのを見たことがあります。真庭で暮らしている人たちがずらりと図鑑化されていて面白かったです。面白くなくても構わないけど、こういう人がいるっていうのが見えると、まちが見えてくることもありますし、平野委員がおっしゃったとおり、社会的な切り口も見えた方がいいと思います。読んでいる方も納得するし、載ったり探されたりする方もモチベーションが上がると思います。ただ麻雀をやっているというよりは、高齢者の生きがい対策とか認知症対策とかそういう展開の方が切り口として、モチベーションも上がるかと思います。

人物を載せるというのは一つの参画の入口だけれども、芦屋市自体はすでに入口にいるのではと、皆さんの意見をまとめるとそういうことなのかなと思います。

そろそろ時間ですので、今日の議論は、まだまだ名残惜しいですが、このあたりで閉会にしようかと思います。事務局からお知らせなど何かありますか？

（事務局：山田）

ありがとうございました。皆さまの貴重なご意見をいただきましたのと、こちらとしましても宿題をいただいて、これから市民参画課としてどうあるべきなのかというところも整理をしたうえで、今年度中にまた集まれたらと思います。年度内に集まれたらと思いますので、また日程を調整させていただきまして、次回開催をさせていただきたいと思いますのでよろしくお願いたします。

（渡辺会長）

では本日はこれを持ちまして、会議を閉会いたします。